

Die (友情) Freundschaft

事務局：
〒010-1632 秋田市新屋大川町 12-3
秋田公立美術大学 野村研究室内
<http://www.jdg-akita.org>
(018)888-8110
nomura@akibi.ac.jp

世界で最も芳醇な香りのソーセージ

副会長 渋谷義博



古典的な錫製の皿に、ザワークラウト (Sauerkraut) や洋唐子のゼンフ (Senf) とともに盛り付けられた“それ”は、食欲をそそる芳醇な香りを放ちながら登場した。

その僅か 80cm の眼前に運ばれてきた“大人の人さし指大の固体”は、見事なまでに嗅覚を刺激し、食欲亢進ホルモンの発生を促す。

1971 年、現代のように連日世界中で直行便が飛んでいなかった時代。

渡欧する最も効率的なルートは北周りで、羽田からアンカレッジを経由、北極点の近くを、運が良ければオーロラの歓迎を受けながら飛行し、目的地まで 18 時間の行程であった。

1954 年に始まった戦後日本の高度経済成長も終盤を迎えていたが、同じ敗戦国である当時の西ドイツとともに、技術立国として世界の注目を浴びていた時代。

数多くの若者が青雲の志を抱いて、欧米先進諸国を目指していたその時代、ドイツ本社企業留学の機会を得た私は、ニュールンベルクに拠点を構えた。

中世の歴史かぐわしきニュールンベルクは、15～16 世紀、ドイツ南部の商工業都市として発展を遂げた。

現在、人口約 50 万人を擁し、バイエルン州で州都ミュンヘン (Muenchen) に次ぐ都市として繁栄を続けている。

旧市街の中央市場 (Hauptmarkt) に程近い聖ゼーバルド教会 (St. Sebald) に隣接する小さなレストラン・ブラートヴルスト・ホイスレ (Bratwursthaeusle) では、欧州の“原産地名称保護制度”で認定されたニュールンベルガー・ローストブラートヴルスト (Nuernberger Rostbratwurst) というソーセージが、郷土のソウルフードとして提供

されている。

添えられるザワークラウト (Sauerkraut) は文字通り酸味があり、消化剤の役割も果たすとのこと。

煎った麦芽、小麦、ハーブ、レモン、ホップ、さらには、干し草 etc. と 10 種類を超える香りが楽しめる本場ドイツのビールは、ソーセージとの相性が良いことこの上なし。

店の中央部に設えられた大きなグリルで、ブナの薪を燃料にして焼き上げるため、よりさらにその芳香が増すのだとは店主の解説。

毎週末、この香り高いソーセージに在り付いていた食餌効果は、世界各地から集まった研修仲間とのエスプリに富んだ会話も相乗効果を齎し、ドイツ本社での研修プログラムに没入し、ときに疲労困憊に陥った私を大いに励ますという形で出現した。

ドイツ語が飛び交う空間で技術習得に邁進することが適い、帰国後、日独両国の命題である基幹産業の振興に微力を尽くすことが出来たことは、今でも私の誇りとするところである。



レストラン・ブラートヴルスト・ホイスレ
(Bratwursthaeusle)

(<https://tourismus.nuernberg.de/geniessen/restaurants/fraenksche-restaurants/location/behringers-bratwursthaeusle/>より)

《会員よりご寄稿いただきました》

「パッサウ (Passau) 訪問記」

会員 石黒 こずえ

初めてパッサウを訪れたのは、今から 20 年以上も前のことだった。南ドイツを中心に約 2 週間の個人旅行をし、パッサウには 3 日間滞在した。当時は秋田に住んでおらず秋田日独協会にも所属していなかったのだが、姉妹都市だということは知っていたので旅行先に選んだのだった。パッサウ駅前の観光案内所で貰ったパンフレットに掲載された場所を 3 日間で全て巡りきるという満喫の内容であったが、知り合いもおらずただ一人で観光施設を訪れるだけの旅であった。数年後に秋田に戻って日独協会に入会すると、パッサウに知り合いが増えた。今回の旅は、入会してからの 20 年間で交流のあった人々との絆を深めるという、前回とはまるで異なる心温まるパッサウ滞在となった。

今回の旅ではツィーグラー (Ziegler) さんのお宅に泊めていただいた。ツィーグラー家とは以前より家族全員と面識がある。お父様のロナルド (Ronald) さんは 2002 年にスポーツ交流団の団長さんとして訪秋した際にお会いしている。2 年後の 2004 年には奥様のエリザベート (Elisabeth) さん、娘さんのハナ (Hana) さん、息子さんのマティアス (Matthias) さんの一家 4 人が交流団員として秋田を訪れており、私は別の交流団員のホストファミリーをしていたため、滞在期間中ツィーグラー一家とも交流があった。そして昨年 2017 年の夏にハナさんが姉妹都市交流プログラムで秋田に再訪し、その際に我が家へホームステイした。その繋がり今回私を快く招待してくださった。

旅の始まりは 7 月 4 日夜。最終便で秋田から羽田へ飛び、そのまま羽田空港国際線ターミナルから日付が変わった深夜にフランクフルトへ向けて出発した。5 日朝にフランクフルトからミュンヘンへ乗り継ぎ、そこからは電車でパッサウに移動。午後にパッサウへ到着。まず最初に訪れたのは街の中心にあるシュテファン大聖堂だ。この日は木曜日。毎週

木曜の夜にシュテファン大聖堂内でオルガンコンサートが開催される。世界最大級の教会パイプオルガンから放たれる音は重厚で、体の奥に響くような感覚が忘れられない。

翌朝ツィーグラーさんのお宅にお邪魔した。お庭にりんごの木や家庭菜園がある素敵なお宅で、4 日間、家族の一員として過ごさせていただいた。ガラス張りのサンルームはとても居心地が良く、ここで取る朝晩の食事はとても美味しかった。パンに塗るのはたっぷりのジャム。しかも庭で採れた果物を使った自家製。甘さ控えめで果物の素材を活かしたちょっぴり酸っぱさの残る味は格別に美味しかった。

週末にはパッサウから北へ車で約 30 分の距離にあるフライリヒト・ミュージアム (Freilichtmuseum Finsterau) へ連れて行っていただいた。敷地内に古い時代の農家をそのまま移築した建物が点在し自由に中を見学できる野外博物館で、当時の生活様式をそのまま体験できるイベントがたくさんあり非常に興味深かった。木製の屋根瓦を制作していたり、中世ヨーロッパを舞台にした小説に時々登場する手回し式糸紬ぎを実演していたり、それで作成した製品を売っていたりした。昔ながらの製法でその場で作って来場者に振る舞う食べ物もいくつかあり、ジャガイモを使った軽食や直火で焼きたてのワッフルをつまんだりした。当時の釜を使ってパンを焼くイベントもあり、焼き立てのパンをもちろん購入してさっそく夕飯にみんなでいただいた。

バイエルンの森が見たいという私の希望で、ナショナルパーク内にある木製展望台 (der Baumwipfelpfad im Nationalpark Bayerischer Wald) にも連れて行っていただいた。遊歩道を通って森を散策した後、カタツムリの形状をした木製の長いスロープを登って頂上まで行くと、そこは見晴らしの良い展望台でバイエルンの森が一望できた。山の向こうはチェコで、国境を超えるとボヘミアの森だそう。ここまで来たら、是非とも国境を見たい。急遽チェコとの旧国境検問所にも連れて行

っていただいた。標識が立っているから境はわかるが、車ですっと通り過ぎてしまうほど国境はあっけないものだった。

ジャガイモを食べたいという私のリクエストで、夕食にフィンガー・ヌードルを作ってくれた。これは、マッシュポテト（のように見えた）に小麦粉と塩を少々混ぜて粉ね、中指の大きさに成型し、サラダ油とバターでこんがり炒めた料理である。こねたり炒めたり作業が楽しそうで、一緒に手伝ってもらった。指のヌードルという名だが決して麺ではない。ヨーグルトのような酸っぱいソースをかけるか、あるいは甘いリンゴのコンポートを添えて食べる。美味！

今回のパッサウ訪問でもう一組会いたいご家族がいた。マイズル (Meisl) さんご夫妻だ。お二人とは 2004 年の夏に秋田で出会っている。秋田市建都 400 年記念行事の一環で姉妹都市パッサウからの訪問団員として訪れており、その際のパーティで知り合った。その時はほんの 15 分程度お話しただけだったのだが、それから毎年クリスマスカードのやりとりを続け、今回 14 年ぶりの再会となった。連絡をしたところとても歓迎してくださり、こちらとしてはランチやお茶でもご一緒できたらと思っていたのだが、なんと国境を超えて隣国オーストリアのザルツブルグまで連れて行ってくださった。ザルツブルグの街が素晴らしかったのはもちろんのこと、道中の車窓から見える農村や森の美しい風景に心を奪われ、また突然現れた古城の姿に見惚れる一幕もあった。

7 月 9 日、近い将来の再訪を誓い名残惜しくパッサウを後にした。ホームステイのおかげで、普通の旅では味わえないドイツ人の暮らしに溶け込むような貴重な体験をさせていただいた。言葉がうまく伝わらずもどかしい思いをすることが多く、帰国後の語学力向上を誓ったことはもちろんだが、日本の事を聞かれたときにうまく答えられないことがあり、もっと母国のことを良く知っておく必要があると実感した旅でもあった。

ガイドブックには載っていないような場所に連れて行っていただき、いつもの一人旅では決してできないことを体験させていただいた。心からの温かいおもてなしをくださったツィーグラールさんご一家には感謝してもしきれない。秋田日独協会に入っていないければ、こんなにも長年に渡って複数のドイツ人家族と交流を持つことはなかったであろうし、このような旅をするチャンスもなかったはずだ。改めて協会の歴史にも感謝したいと思う。



お世話になったツィーグラールさんご一家
後列左よりロナルドさん、ハナさん、
前列左よりマティアスさん、エリザベートさん



バイエルンの森ナショナルパーク内にある木製展望台
(der Baumwipfelpfad im Nationalpark Bayerischer Wald)

《2018 年新年祝賀会・講演会》

2月10日(土)17時30分から新年祝賀会がビアレストラン「プラッツ」で開催されました(参加者32名)。講師は、秋田大学大学院理工学研究科准教授の河村希典氏。テーマ「4人の子供と4ヶ月の南ドイツ滞在～カールスルーエ工科大学での在外研究～」と題し、2017年5月から4ヶ月間の南ドイツ・カールスルーエ工科大学での研究活動およびドイツ各地での活発な交流の様子やご家族の貴重な体験などを沢山のスライドを用いてご講演いただきました。河村氏のカールスルーエ独日協会やパッサウ独日協会の皆様と積極的な交流活動が、今後の秋田日独協会の発展にも大きく寄与することになるだろうとの印象を受ける楽しくかつ興味深い内容でした。



河村希典氏による講演会の様子

《新会員紹介》

2018年度は、3名が入会(7月末現在)。嶋崎浄さん(学生)、武内伸文さん、川口雅史さん。

《今後の予定》

- ・2018年8月：ニュースレターNr.9発行
- ・2018年8月28日：「平成30年度定時総会」,「カールスルーエ合唱団」歓迎会・交流会(アキタパークホテル)
- ・2018年9月19日：「青少年の秋祭り」(主催：ドイツ大使館)参加
- ・2018年9月中旬～：「姉妹都市提携35周年記念公演合唱団員」(募集～練習開始)
- ・2018年10月6日：「秋田市国際フェスタ」参加
- ・2019年2月：「新年祝賀会・講演会」

ドイツ語で格言・諺： Wir leben nicht, um zu essen - wir essen, um zu leben.
われわれは生きるために食べるのであって、食べるために生きるのではない

《編集後記》

近年若い方が入会してくださっています。嬉しいことです。幅広い年齢層から支持される魅力ある会を目指し発展していきましょう。

会員の皆さんからの寄稿やメッセージ、そして、ドイツに関する話題などを広く募集します。送り先は、表紙の事務局の住所へ、または、メールにてお送りください。

秋田日独協会ホームページ <http://www.jdg-akita.org>

法人会員

(株)秋田魁新報社様・(株)JTB東北秋田支店様・(株)東北iツアーズ様・(株)日本旅行東北秋田支店様